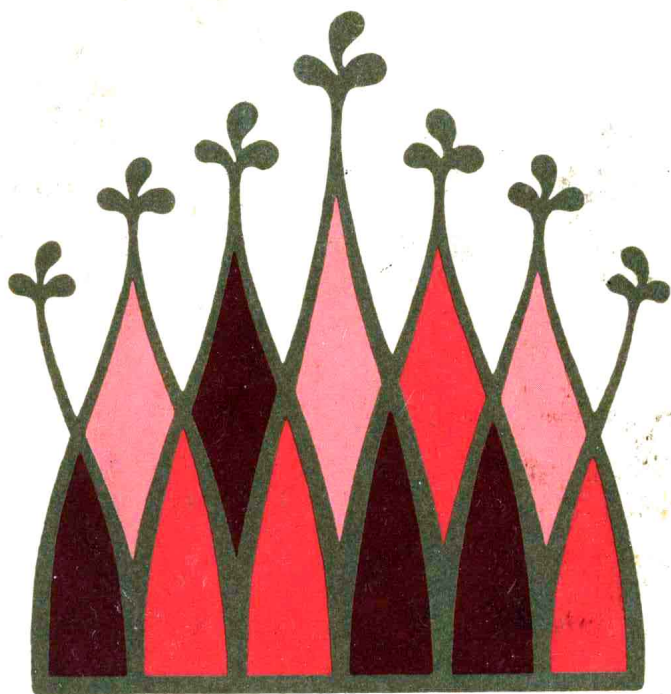


ブルガリアの 民話

真木三三子 訳編



恒文社版

ブルガリアの民話

真木三三子 訳編

■真木三三子■

1933年 甲府市に生まれる。

1955年 東京外国語大学ロシア語科卒業。

訳書 『フリスト・ボテフ詩集』(恒文社),
ツルゲーネフ『初恋』(立風書房),
イヴァン・ヴァーゾフ 詩『こだま』
(平凡社, 世界名詩集大成), その他。



©1980

ブルガリアの民話

定価 2,000円

1980年7月20日 第1版第1刷発行

訳編 真木三三子
発行者 池田恒雄

発行所 株式会社 恒文社
東京都千代田区神田錦町3-3
〒101 電話 291-7901
振替口座 東京5-35824

落丁本・乱丁本はお
取り替えいたします

印刷・鈴木整版 製本・飯塚製本
0098-005020-2273

■
目

次
—
ブルガリアの民話

I 魔法話篇

- 惡魔の弟子 9
巨人オッフと三人の娘 20
少年の耕作 40
隊長の息子たち 49
三人の兄弟と金のリンゴ 58
少年と仔犬と仔猫と蛙の子 73
勇士と盲人 86
生命の水 132
いのち
気のいい雲雀 144
貪婪な目 153
絶世の美女 187
妖精 215
鶴になったシリヤーン 227

II 動物話篇

ずるがしこい猫 249

狼と狐 257

ねずみの嫁とり 266

狐と針ねずみ 275

えらい兎 284

偽巡礼 287

III 風俗話篇

怠け女房 299

三人のばか 307

人喰い熊 315

坊さんの家の嫁 321

どうしようもない男 329

甘っ子ちゃん 337

愚かな富裕商人 348

頓知ペタルとホジャ・ナスレジン 351

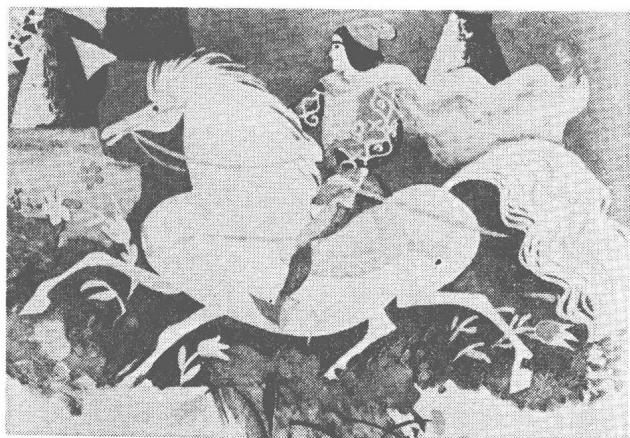
頓知ペタルと竜の話 358

ブルガリアの民話——真木三三子 367

ブルガリアの民話

裝幀・本田
進

I
魔法話篇



悪魔の弟子

ある母親がたいへん怠け者の息子をもっていた。母親は、何か仕事を身につけさせようと思つて息子を奉公に出したが、この息子はどこへ行ってもだめで、主人の許をたび出して来たり、身を入れて働かなかつたりで、何一つ身につけたものはなかった。最後に、母親はある仕立て屋の家に息子を奉公させることにした。そして息子を町へ連れて行つたのだが、折しも雨期で、道はぬかるみ、歩くのも難儀であつた。二人は道端にある深い井戸のふちに腰を下ろして休んだ。

母親は年をとっていたし、疲れがひどくて、腰を下ろすやへなへなど体を屈めてしまった。そして、年寄りがよく呻くように『オッフ』と洩らした。ところで、この井戸の中には、オッフという名の悪魔が住んでいたのである。悪魔は井戸の中から出て来て母親に尋ねた。

「婆さん、わしに何の用があつて呼んだのだ」

そしてそばにいる息子を見て言つた。



「この子はおまえさんの息子だね。どこへ連れて行くのだ」

母親は答えた。

「この子をあちこちに奉公させましたが、いつも逃げて来てしまうのです。まだ何にも身につけていません。こんどは仕立て屋に連れて行こうと思うのです。こんどこそ居着いてくれるでしょう」
すると悪魔は言った。

「何とまあ、このまずい時期に！ おまえさんみたいな年寄りに町までの道のりはつらからう。わしがこの息子を弟子にして預ってやろう。三年仕込んでやればいろんなことを覚えるわさ。三年たったらまたやって来て、息子を連れて行くがいい！」

母親は悪魔が何の職を息子に仕込んでくれるかわからないまま、息子を託して自分は帰って行った。

悪魔は少年を井戸の中へ追いやった。井戸の底は十字路になっていて、四つに分かれた道の先にそれぞれ部屋があった。悪魔はその中の一つに自分の弟子を連れて入った。少年は部屋の中にたくさんの子供の頭が並んでいるのを見て仰天した。そして、師匠となった悪魔に、頭が並んでいるのはどういふことかと尋ねた。

「これはな、わしが教えたことを聞かなかったり忘れたりした子供の頭さ」
と悪魔は答えた。

そして、少年を仕込み始めたのであった。少年は目のあたりの光景にびっくりしたので、悪魔が教えることを注意してよく聞き、残らず覚えこもうとしっかり観察した。悪魔は二、三時間教えると出て行つた。入れ代わりに悪魔の妻が部屋に入つて来た。彼女は弟子を呼んで言った。

「この頭を見たでしょう？　これはみんな、あんたのようにあたしの夫の弟子になった男の子の頭なのよ。男の子がするべきことをちゃんとやって悪魔に見せるでしょ。悪魔と同じようにすっかりできるようになると、悪魔は嫉妬して殺し、頭をここに突き刺すのよ。悪魔はほかの人が自分のような腕を持つことをいやがるの。あんたもそうよ。もし命が惜しかったら、何でもよく見習って覚えこむのね。だけど、自分が熟達したところを彼に見せてはだめよ。彼はあんたに教えながらこの鞭で打つけれど、それを我慢して、身につけた技術を示すようなことはしなさんな」

弟子になった少年は言われたことを守つた。彼には悪魔の師匠が教えてくれることが性に合つていて、何でもよく聞き、よく覚えた。しかし、師匠の前では、理解したことや身につけたことを何一つ形にしてみせはしなかった。悪魔は、少年の前で鬼になったり、狐に変わったり牛に変身したり犬の姿をとったりしてあらゆる動物に身を変えて見せ、またそのほかにもふしぎな術をたくさんやって見せた。弟子はそれを真似て練習した。そして、自分一人になると、師と同じくやつのけるようになった。しかし、悪魔の前では、できないふりをしていた。それで、悪魔は少年を打った。しかし、少年は、術を身につけるまでは、と堪えたのであった。

こうして約束の三年が過ぎた。三年たった時、母親は息子を連れに井戸の縁に来て、また「オッフ！」と叫んだ。すると悪魔が井戸から出て来た。悪魔の弟子も母親の声を聞いて煙に変身し、師匠のあとから出て来た。悪魔は少年が自分と同じように変身できることを見てとり、母親にあと半年置いてほしいと頼むことにした。その間に少年を殺してしまおうと思ったのである。

そこで、彼は母親にこう切り出した。

「婆さん、おまえさんの息子はえらい怠け者だ。やさしくしてみたり叱ってみたりして教えたのだが、どうにもなりやしないんだ。言うことも聞かなければ、理解もできない。三年教えたのに、わしの腕前をちっとも学びとれなかった。あと半年、わしのところに置いてみないか。少しはましになるだろう。半年後に連れに来るといい。そうすれば何かしら学びとってるだろうから」

しかし、少年はもうたくさんだった。それに、母親の方も息子を置いて行くことにうんと言わなかった。彼女は悪魔にこう言ったのだった。

「息子は今でもう十分です。仕事のためにこれ以上置いとくことはできません。わたしの手助けをしてくれる人がいないのです。これまでよそ様の仕事をして食べてきました。よその家の掃除、洗濯、片づけなどしてね。でも、もうできません。寄る年波には勝てません。目もかすんできましたし、体も弱りました。ちょっぴりだけ畑がありますから、息子にそこを耕させ、種を播いて——そうすれば食えることぐらひは間に合います。それがあたしに残された途です。生きてる限

り、もう息子は手放せません。つらかったです！」
悪魔は言った。

「それなら、せめて三カ月置いときなさい！」

「一日だって置いとけません」

と老母は答え、息子を連れて村へ帰って行った。

村に帰るには山を一つ越えなければならない。母親は歩き疲れ、山の中腹に坐りこんでひと休みした。ちょうどその時、トルコの高官が道の向こうに現われた。狩りをしてるのであった。

母親は、高官のところで働いていた時のことを思い出し、息子に愚痴をこぼした。高官の家では一日じゅう働かされ、少しも休む暇がなかったこと、疲れ果ててぼんやりしていると石で打たれ仕事に追いやられたことなど、彼女は、高官に聞こえないよう、息子に小さい声で話して聞かせた。息子は言った。

「わかった。それなら今おいらが仕返ししてやるよ。おいら獵犬になってみせる。あいつはおいらを買いたがるからね。そしたら母さんは売ってもいいと言って千グロシユ要求するんだ。だけれど、おいらの背中の掛布は売っちゃいけないよ」

息子は立派なたくましい獵犬に変身し、道にとび出して行った。そして茂みにちょっと身を隠したかと思ふや、一匹の狐を高官の前に追い立てて行った。高官は狐を仕とめた。その時母親は

道に姿を現わし、獺犬を呼んだ。犬は喜んで彼女の方に駆け寄って行った。高官は、その犬を買いたいがいくら払えばよいか、と母親に尋ねた。母親は言った。

「千グロッシュです。でもこの掛布はお売りしません。家にもう一匹犬がいて、それに付けてやろうと思いますので」

高官は言った。

「おまえの掛布なんか要らん。おれは絹をかけてやるわい。それは取って行け」

高官は老母に千グロッシュ払って獺犬を連れて行った。母親は掛布を取って村の方へ歩き出した。高官は、今買った獺犬を追い立て、狩りを続けた。犬は岩の突き出たところへとんで行き、低いところにとび下りて隠れると、再び少年の姿に戻った。高官も犬を追って低いところの下りてみたが、獺犬はどこにも見えなかった。

「あ、子供、獺犬が走って行くのをこの辺で見かけなかったかい？」

少年は答えた。

「見ました。この藪から狼を追い立てて行きました。向こうの藪へ行ったと思います」

高官は藪に沿って追って行った。少年は道に出、母親に追いついた。

二人は市場に近づいた。少年は言った。

「母さん、おいら、いい馬になるから、それを二千グロッシュで売るといいよ。だけど、おいら